

多摩デポ通信 第35号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2015年8月1日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

カーリルとの研究の 現状について、館長会 定例会で説明しました

7月15日、多摩教育センター（立川市）で、東京都市町村立図書館長協議会の定例会があり、多摩デポはこの間の研究成果を話すことを求められ、座間理事長、堀、（株）カーリル吉本代表が説明してきました。館長会は利用者の請求に応えられるための保存・除籍の共同体制作りを課題としており、現在も共同利用図書館の再検討プロジェクトが活動中です。共同書庫

の実現が見通せない中で、各館で保存する（地域に希少な本）が増えていきます。書庫の限界の中で、除籍可能なタイトルを選ぶ検索作業の負担がどの自治体でも増えています。

多摩の市町村立図書館の全所蔵冊数は「東京都公立図書館調査」では2013年度末で1880万冊となっています（毎年新規受け入れられ、除籍され、中身は少しずつ変わっていきま

す）。この蔵書のヤマに向かい、各館は除籍の際、タイトルに希少性の面から歯止めをかけるわけです。それでは、そもそもこの

冊数で、全部で何タイトルの本があるのでしょうか？漱石の『坊っちゃん』や『ぐりとぐら』のように、どの館にもあるだろう本も全くそこだけの本もあります。

〈多摩で1冊か2冊しか所蔵されていない〉希少なタイトルは何件か？中には地域資料など（その館の貴重な基本資料）も含まれる

でしょうが、もし希少な図書をすべて入れるとしたら、何平米程度の保存書庫が必要なのでしょうか？

いつそ〈所蔵タイトルと冊数分布〉のデータベースを作れないでしょうか。

多摩デポは昨年秋から、カーリルと「バーチャル・デポジットライブラリー」という共同研究を行なってきました。

カーリルの技術と知恵を借りてまずはISBN付き図書の所蔵実態をつかもうと考えました。国立国会図

多摩地域の出版社の話聞く多摩デポ講座を企画していたのですが、延期となってしまいました。申し訳ありません。多摩デポ講座、講演会については決まり次第、ご連絡します。

時節柄、ご自愛ください。



その結果、多摩全体で約102万タイトル、56%の図書を所蔵していることが分かりました。それら各タイトルの所蔵数の一覧もつかめました。これからはいちいち横断検索しなくても、ISBN付きの本なら、多摩地域内でそのタイトルが何冊あるかが分かる（そして原則的には、今後は定期的な追加調査によって蔵書の増減をデータに反映していけばいい）。

保存スペース拡大という現実条件は見えてきませんが、具体的にはこのように、〈多摩地域で一冊、二冊〉の希少な本を容易に選別することは出来ず。今は、現場での作業に使いやすい方法の検討と検索精度の検証を行なっています。これを館長会でぜひ活用していただければいいと考えますと説明してきました。

点検・選別が容易になることで（希少本は残したい）という反対のない理念が（残す）行動への参加率を上げ、共同保存の有効性の理解と、共同書庫を生み出すステップになっていけばいい。特に2017年1月竣工を目指し建設が進む新都立多摩図書館への協力要請への動きが出てくることを期待したいと思います。

館長会での説明は十分で終えましたが、質問が相次ぎ（例えばISBNがない図書同定の可能性など）、時間があつという間に過ぎ、会場を後にしました。

なお、『出版ニュース』7月上旬号に掲載された吉本龍司氏の論文「ビックデータで見えてくる多摩地域図書館」を、吉本氏と出版ニュース社の了解を得て印刷・同封しました。読んでいただければと思います。

（事務局 堀）

（株）カーリルとの共同 研究報告 その3

・5月21日には、国立国会図書館の『カレントアウェアネス・E』のNo.281に『共同保存図書館実現に向けた多摩デポとカーリルの共同研究』（多摩デポ理事・齊藤誠一）が発表されました。（E-1673
<http://current.ndl.go.jp/e1673>）

・『情報の科学と技術』9月号には、「公共図書館の蔵書構築と共同保存事業―各館書庫からの除籍をどのように進めていくか?―という堀渡の論文が掲載予定です。

多摩デポとカーリルの取り組みが、外部に発信され始めています。この動きを追い風に共同保存図書館実現に向けた活動を継続します。

津野さん、黒子さんに
今期も顧問を引き受けて
いただきました

多摩デポでは、定款第20条の規定に基づき、顧問を置くことができます。これまで津野海太郎さん（和光大学名誉教授）と黒子恒夫（元保谷市立図書館長）さんにお願ひしてきました。

お二人にはいろいろな場面で指導・協力をお願いし、多摩デポの活動にご尽力いただけてきました。

今期も引き続きお願いすることを総会後の6月7日理事会で全員一致で決定し、お二人にお願ひしました。それぞれ「快諾」のご返事をもらい、今期二年間も顧問を続けていただくことになりました。

会員の皆様に報告します。
（理事長 座間）



研究報告

「多摩デポ×カーリル
ビッグデータで見えて
くる多摩地区の図書館」
に参加して

堀越洋一郎（会員）

今年度総会の後に開催されたイベントは、例年の講演会という形式とは違い、多摩デポと（株）カーリルとの共同研究の成果報告会で会員外を含め28名の参加があった。この共同研究は、昨年10月に締結したパートナーの共同保存のためのテスト的なデータベース作成を中心としたものであり、総会の第一号議案での事業報告があったものである。

の質疑応答、という4部構成で約1時間40分の予定時間を超え、活発な議論を伴う時間であった。

今回の発表では、調査結果として、いわゆる多摩地域のラスト・ワン・ツー本が約32万冊と具体的な数字が報告されたことが大きかったと言えよう。

その数字および調査方法の詳細は、『出版ニュース』7月上旬号に吉本氏による「ビッグデータで見えてくる多摩地区の図書館―多摩地域の図書館の蔵書データを斬新な方法で有効活用します」と題しても発表されており、本通信に別紙として同封されているのでこちらを参考にさせていただく事とする。

今回の調査でISBN付与本の、多摩地域29館でのラスト・ワン・ツー本のタイトル数は約32万冊という具体的な数字が示された。

具体的な32万冊という数字は、多摩デポ以外ではともすると一人歩きしかねないものであるように思える。

出てきた数字だけではなく、それらにどのような傾向があるのか否か、を知る事も、ある条件内の数字である事の説明にも必要ではないかと考える（この数字が、今すぐにリアルな保存庫のスペースとしてイメージが先行する事が無いためにも）。
どのような書籍群であるかを概観するために、以下についての統計を取る事を提案したい。

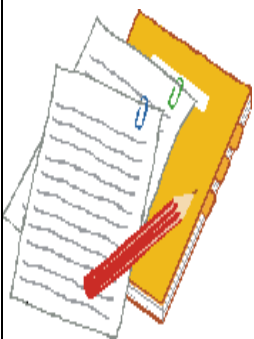
- ・分類―目録作成時に採用している分類法の版により厳密な統計的数値は取れないであろうが、傾向はつかめるかもしれない
- ・出版者―出版社の創業、廃業、出版点数に左右されるかと思うが傾向は見えないのではないか。また、

多摩地域に所在する出版社などの出版物はラスト・ワン・ツー本だから保存するのではなく、出版目録と照合し、欠本を手当するなどして保存対象にする等の資料に出来ないかと思う

- ・タイトルワード―書名や副書名などの単語を切り出して、どのような書名が多いかを見る。実用書（ガイドブック、ソフトウェアの解説書等）に除籍傾向が見られると想像される

- ・その他として、参考図書、大型本、禁帯出などの属性による冊数の把握

除籍候補は、各館の利用状況により異なる事情があり選定されるものであるが、



上記のような統計から得られた結果は、選定前の予備調査に活かす事も出来るのではないだろうか。全館同時期に予備候補を選定するといった事は業務の上でも手間であるのは承知の上であるが、例えば保存状態が良いものを共同保存に充てる（保存状態が良くないのを除籍という逆の考えもあるであろう）という、各館から共同保存に移行するための方向性といった事にもつながらないだろうか。

今後の課題の一つとして、非ISBN付与本の調査については、報告や対談内でも述べられており、機械的な同定は難しい点、人的な関与の必要性、また書影を使つての補助、といった事も言及があつた。

ISBNのようなキーがない事はもちろんであるが、タイトル、責任表示、出版者、出版年の組み合わせ（こ

れとても記述形式の違いや書誌入力へのミスがある事が想定できるが）で同定する事は無理があるとしても、多摩地域館の非ISBN付与本データから、上記の項目でソート（並び替え）をしてある程度のラスト・ワン・ツールの見当をつける事は非現実的であろうか。

今回明らかになつた32万冊という数字は概数であつても、非ISBN付与本を除く、という註とセットで語らなくて良いようにする時期が来るであろう。参加者からの質疑応答でも出た、何のために何を残すのかという根源的な問いに対して、明確な方針と共に示すためにも、今回公表された32万冊という数字がいろいろな物事の根拠にされないためにも、必要であると考ええる。今回の共同研究は協定締結からの半年程度である成果が出たが、その成果を生

むための準備段階、検討があつたからこの期間で得られた事を考えれば、方針の策定という準備段階が必要である事は、リアルな保存施設の要件と共に、次の段階に向けての大きな要件であると言えよう。また、共同研究相手としてのカーリル側が、図書館の活動や利用者の視点を持つて図書館のサポートを積極的に行う組織であつたこと（もつと言えば技術者だけではなく郷土史家としての立ち位置を持つ吉本氏との出会い）も、成果を得るための議論を深めて行つたと言えよう。

今回の研究成果と仕組みが他地域の共同保存の一助になるためにも、共同保存の枠組みとしての参加館の性格、地域性と保存対象についての検討といった要件の明確化がセットで述べられる必要があるうと考ええる。

★会の現勢

2015年7月31日

現在

●会員

(個人会員96名)
(団体会員3団体)

●賛助会員

(個人41名)
(団体1団体)

会の活動はみなさまの
会費・ご寄付で支えられて
います。会費の納入が
まだの方はお早く振り込
んでいただけますよう、
よろしく願います。

●年会費

正会員 (個人・団体) 五千円

賛助会員 一口 二千円
(個人一口 団体五口以上)

